愛媛県知事賞　壁新聞部門
「「医聖」と呼ばれた医学者　眞鍋嘉一郎」
新居浜市立角野小学校　第６学年　渡邉　咲來

「医聖」と呼ばれた医学者 眞鍋嘉一郎

1878～1941

新居浜市立角野小学校
6年 渡邉咲來

檜木神社にて

プロフィール

眞鍋　嘉一郎（1878～1941）

西条市大町出身。愛媛県尋常中学校（現、県立松山東高等学校）、第一高等学校（現、東京大学教養学部）、東京帝国大学医科大学（現、東京大学）を卒業。物理りょう法、レントゲン学、温泉りょう法の先駆者。

３年間ドイツに留学し物理りょう法（理学りょう法）を研究し、帰国後は同大学につとめたのち伝せん病研究所の技師となった。内科の治りょうにエックス線、ラジウム鉱泉電気治りょうなどを導入し、医りょう技術の発展にじんカされた。また、「レントゲン」という呼び方を日本で広めた。

年表

年号	西暦(年)	主なできごと
明治11年	1878	8月8日 西条市大町に生まれる
明治29年	1896	愛媛県尋常中学校を卒業
明治33年	1900	第一高等学校を卒業
明治37年	1904	東京帝国大学医科大学を卒業
明治38年	1905	東京帝国大学医科大学副手兼就任属医院青山内科にさん務
明治44年	1911	ドイツに留学する（ドイツ留学時の眞鍋）
大正2年	1913	ドイツ医学及万有学会に参加　野口英世と初対面
大正3年	1914	東京帝国大学医科大学に講師としてつとめる
大正4年	1915	伝せん病研究所の技師となる
大正15年	1926	東京帝国大学教授に就任 内科物理りょう法の講座を設立する
昭和5年	1930	浜口雄幸首相銃撃事件 主治医として治りょうにあたる
昭和16年	1941	12月29日満63才で逝去

☆野口英世との交流

1911年ドイツに留学したとき、野口英世と出会い、かれがなくなるまで交流が続いた。

☆浜口雄幸首相銃撃事件

1930年11月14日、東京駅頭にて浜口雄幸が銃撃されると、主治医として48日間病棟にとまりこんで献身的な治りょうに努めた。容態は「おならが出るか否かが生死の分かれ目」。そ撃から3日後に待望の一発、病室では歓喜の声が挙がり、新聞各紙も大々的に報じた。しかし本人が無理を押して政界復帰を急いだこともあり、よく年浜口はなくなってしまう。

☆夏目漱石の主治医

眞鍋の漱石との出会いは中学で漱石に学んだことだったが、次弟に信頼関係が深まる。

眞鍋が日本医学放射線学会の会長になったころ、漱石からの頼いで眞鍋はその主治医となっている。ばん年胃潰ようを患化させ動くこともままならなくなった漱石は、「眞鍋さんを呼んでくれ、眞鍋さんは悪くなった時来てみてもらう約束があるんだから」と往しんをいらいし、医りょう・学会・講義と多ぼうな日々を送っていた眞鍋はそんな漱石に毎日時間を割いて夏目邸に往しんし最後はりん終に立ち会った。

眞鍋は「雨月荘談片」や「夏目先生の追憶」などで生前の漱石を語っており、親交の深さがわかる。

◀眞鍋の産湯の水をくみ上げた井戸

眞鍋が生まれた家▶

嘉一郎

西条の三医人

西条市医師会館前

物理りょう法 レントゲン学 温泉りょう法	眞鍋嘉一郎
耳鼻咽喉学	岡田和一郎
栄養学	佐伯矩

先覚三医人
レリーフ

碑文の内容

医聖 眞鍋嘉一郎誕生の家の碑

眞鍋嘉一郎先生は明治11年8月8日当町常心中南にあったこの家で生まれた。

幼少から非凡の英才と言われかえて不屈の精神力をもって働いて学費をかせぎながら学業にはげみ、松山中学一高東京帝国大学医科大学をいずれも首席で卒業してすぐに同校へ奉職した。

先生は非常に多くの本を読んで広く物事を見知ってよく覚えており、語学の才能は先生の知識の深さと経験の広さにはみんな驚いた。

先生はドイツやアメリカ留学から帰って母校に初めて内科物理りょう法学の講座を設立しその主任教授となり、優秀な多くの医師の育成に努められこの新領域に大きな足跡を残された。

さらに学会だけでなく多くの輝ける業績により近代日本医学界の象徴的存在と敬われ広く国民的尊敬を受けたのである。

先生と野口英世先生との交友の情は広く知られているところではあるが、また文ごう夏目漱石や首相浜口雄幸の主治医として深い信任をうけその最後の脈をとられたことも卓越した医術と共に高潔な御人格を敬うに足るものである。

ここにわが郷土出身の医聖眞鍋嘉一郎先生を敬慕する、石川梅蔵宮司はかつての先生の門下生今川七郎博士らと相談して生家保存会を結成し関係の方々の御協力を得て、産土大神橘本神社の神域に記元して移築しこれを保存して先生の学徳を永く後世に伝えようとするものである。

満室にて
▶浜口首相
後列右:眞鍋

ばん年の眞鍋

参考文献

・西条市ウェブサイト
・愛媛生涯学習センターウェブサイト
・Wikipedia
・夏目漱石全集別巻／瀬野清二／株式会社岩波書店／2018
・漱石追想／十川信介／株式会社岩波書店／2016
・発掘えひめ人一近代を拓いた101人一／秋野隆史／愛媛新聞社／2002

きっかけ

私の弟は生まれつき心臓に病気があり、今年の夏休みに入院して手術を受けた。たった1日で弟の病気を治してくれるなんて、お医者さんは本当に偉大だと感じた。

そんな中、愛媛には「医聖」と呼ばれたとても優秀なお医者さんがいたことを知り、くわしく調べてみたいと思った。

調査方法

・ゆかりの地を訪ねる
・インターネットで調べる
・本を読む

檜木神社の案内板

調べて見えた眞鍋の人物像

①子どもの頃から優秀だった

5才のとき父をなくし家計は苦しかったが、小学校から大学卒業までずっと首席で、特待生として勉学を続けられた。

②大変な努力家だった

努力に絶対的価値を置いた人物で、とりわけ「努力量」というものにこだわっていた。

座右の銘は「人一度(ひとたび)すれば、我十度(われとたび)す。人十度すれば我百度(われひゃくたび)す。」

③教授でありながら研究よりりん床に徹した

信念は「医学の最後の目的は治すこと」で、夏目漱石や浜口雄幸などの著名人の主治医を務めた。

④郷里への愛着が人一倍強かった

活やくの場は東京であっても、地元出身学生のための西条学舎建設に関わったり、帰郷した際は必ず生家を訪ねて「おれはあの奥の三畳の間で生まれたんだよ」「おれの産湯はあの井戸の水だよ」などと回想していた。

まとめ

眞鍋さんがとても優秀な医学者だったのは、努力をおしまないからだと思った。優秀な医学者になるまでには苦しいこともたくさんあっただろう。でもそのおかげで今の私たちは安心して医りょうを受けられていることがわかった。眞鍋さんが発展させてくれた医りょう技術に感謝しながら、私も努力をおしまず最後まであきらめない生き方をしたい。